

芦屋大学論叢 第78号
(令和5年3月8日)抜刷

《研究ノート》

森のようちえんの社会情動的スキルと認知的スキルの育ち

—縦断調査 2 年目の検証—

大 谷 彰 子

《研究ノート》

森のようちえんの社会情動的スキルと認知的スキルの育ち —縦断調査2年目の検証—

大谷 彰子
芦屋大学臨床教育学部准教授

1. 目的

本稿は、森のようちえんに通う子どもの社会情動的スキル（非認知能力）と認知的スキルの育ちの縦断調査2年目の検証である。年少から年中になることでの変容を検証し、一般の就学前施設（幼稚園・保育所・認定こども園等、以降、既存園と記載）と比較することで、自然保育での子どもの育ちの経過の特性を明らかにすることを目的とする。

OECD（2018）は、ウェルビーイングや社会進歩につながるスキルを「『whole child（全人教育）』を対象にバランスのとれた認知的スキルと社会情動的スキル」としている。また、無藤ら（2017）は、社会情動的スキルに相当する言葉として『学びに向かう力』という用語を用い、幼稚園教育要領等において、すべての子どもに育成すべき「資質・能力の3つの柱」として、「知識・技能の習得」、「思考力、判断力、表現力等の育成」とともに、「学びに向かう力、人間性」を挙げている。その「社会情動的スキル」は、「スキル」といわれているように訓練すれば身につく能力（汐見2018）であり、主体的な遊びを通して子どもに身につくものである。自然環境が子どもの育ちに大きな意味を持つ森のようちえんでは、子どもは自然という自分自身ではコントロールできない環境の中で困難を乗り越え、他者と協力し学んでいくことで心身の成長を促すことが目指されている（友定2011）。その育ちは、設定保育ではなく自発的な遊びの展開を重視し、大人の教育的意図や人為的環境ができるだけ排除した環境を子どもに提供することで、子どもは感じ、知る主体者になることが許されている（樂木2022）。しかしそのように関わることは、これまでの学校教育の中で育った保育者・保護者には難しい課題である（汐見2018）。

これまでの大谷（2022）の森のようちえんの保護者を対象とした研究では、森のようちえんの年長児の社会情動的スキル（好奇心、協調性、自己主張、自己抑制、がんばる力）は、すべての項目で既存園より高く、特に【好奇心】【自己主張】【がんばる力】の育ちが顕著であった。また、森のようちえんの母親は、子どもが「何をしたいのか把握」し、「叱るより褒め」「指図せず自由にさせ」「やってはいけないといったことを子どもがしたとき黙ってみている」といった見守るかわりが有意に高く、「教える」「従わせる」といった【教化的かわり】が極端に低いことが示され、その関わりが子どもの社会情動的スキルの育ちに好影響を与えていていることが明らかになっている。他に森のようちえんの社会情動的スキルの育ちに関する研究には、吉澤ら（2021）が、10の姿の特徴を認可保育園との比較から検証し、木戸（2016）は、自然の中では保育者の了解を得ずに自分で考えて遊ぶことで主体的で自立的な育ちがあることを示唆している。また、観察力や好奇心の育ちについては河崎（2016）、水谷・今村（2014）、協調性や協働性については柳原（2018）、杉山ほか（2015）、挑戦や忍耐力の育成については金子・西澤（2017）、西澤ほか（2016）、卒園児のレジリエンスと自尊感情については（山口ら2021）などの実践研究が報告されている。一方、認知的スキルの育ちについては、柳原（2019）により園児の

行動、言動を参与観察法で調査し、認知的発達の側面からみた育成の過程を、6つのサイエンス・プロセス・スキルの視点で考察し、園児たちは全てのサイエンス・プロセス・スキルを習得し育成しているという検証がなされているものの、他には殆ど見当たらない。森のようちえんの子どもの育ちの経過を社会情動的スキルと認知的スキルの両観点から客観的に検証することは、子どもの発達に合わせた育ちを保障する保育を行っていく上で必要不可欠であると考え、筆者は昨年度より森のようちえんの保護者を対象に縦断調査を行っている。

そこで、本稿では森のようちえんの年中児を対象に、社会情動的スキルと認知的スキルの育ちを既存園と比較し、森のようちえんの年中児の育ちの特性を明らかにしていく。

2. 方法

2.1 対象者

全国の日常型森のようちえん 98 園の年中児の保護者 111 件（配布数 635 通、回収率 17.5%）。

2.2 調査時期

2022 年 2 月～3 月に自記式アンケートを各園に郵送し、2022 年 3 月～4 月に回収した。自記式アンケートに QR コードを添付し、Web によるアンケート記入も可能とした。

2.3 分析方法

本研究でのアンケートは、NPO 法人ネイチャーマジック森のようちえんさんぽみち 野澤俊索理事長と共同で作成したものである。質問項目は、ベネッセ教育総合研究所（2016）「幼児期から小学校 1 年生の家庭教育調査 縦断調査 第 5 回幼児の生活アンケート（1995 年より 5 年ごとに実施している 2015 年の調査）」の「第 6 節 幼児の発達状況」から採用し、表現に若干の変更を加えたものに、森のようちえんならではの質問項目を加え作成した。質問はすべて 4 件法で回答を求めた。比較対象として、前述のベネッセの保護者アンケート（調査地域：日本全国、対象：年少児から小学校 1 年生までの縦断調査に同意し、調査に中断することなく継続して参加した母親、サンプル数：年少 1500, 年中 1460, 年長 1074, 調査時期：年少児 2012 年、年中児 2013 年、年長児 2014 年）の結果を用いた。以降、森のようちえんの比較対象として「既存園」と記述する。また、比較対象の年少児は、全国の森のようちえんの保護者を対象に 2021 年 2 月～3 月に調査した結果であり、今回の年中児と同じ子どもたちを対象としている。

2.4 倫理的配慮

アンケートの実施に際して、NPO 法人森のようちえん全国ネットワーク連盟理事会に研究の趣旨やアンケート内容、個人情報の遵守などを説明し承認を得た。アンケートには、調査の目的・倫理的配慮を記して無記名とし、回答は統計的に処理され個人が特定されることはないこと、回答しづらい項目については、「答えられない」の選択肢を設けたことを明記した。また、前述のベネッセの保護者アンケートの結果を用いたが、引用にあたっては、ベネッセ教育研究所の HP に「研究・教育、その他の公的な目的の場合は、ご自由に引用・転載していただいて構いません。」との記載があり、出典記載例に則って出典を引用・参考文献に明記している。

3. 結果と考察

3.1 園での経験

「遊び込む経験」「設定的な活動」「共同的な活動」に分類される 14 項目の経験について、森のようちえんの年少・年中児の保護者を対象に調査を行い、「とてもよくある」と「よくある」を選択した割合を合計し、既存園 5 才児の結果と比較したものが図 1 である。園での経験に関する検証結果は、既存園では年少、年中ではなく 5 才児対象のみであるため、5 才児の結果を比較対象として用いる。

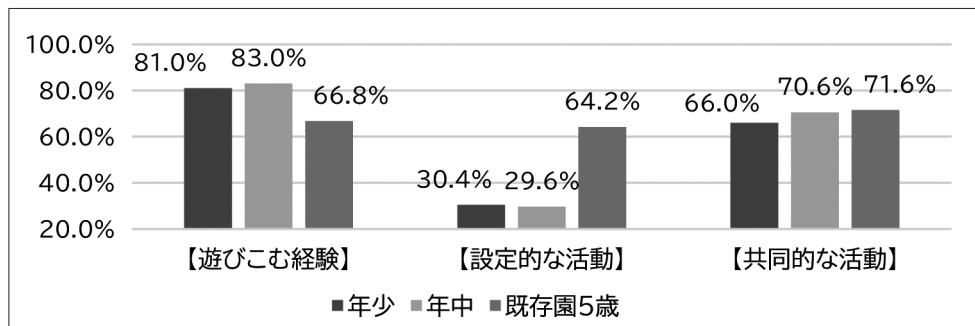


図 1 園での経験の比較

年少から年中への変化として、「遊びこむ経験」が 2.0 ポイント、「共同的な活動」が 4.6 ポイント増加し、「設定的な活動」が 0.8 ポイント減少している。年中と既存園の比較では、森のようちえんは「遊び込む経験」が 83.0%，既存園 66.8% と 15 ポイント以上高く、「設定的な活動」は年中 29.6%，既存園 64.2% と既存園より 30 ポイント以上低く、「共同的な活動」はどちらも 70% 程度と体験割合に大きな差は認められなかつた。既存園では、「遊び込む経験」「設定的な活動」「共同的な活動」を概ね同程度にバランスよくおこなっているが、森のようちえんは、「遊びこむ経験」が多く「設定的な活動」が少ないことが特徴であり、年中になりその特徴がより顕著になっている。

表 1 は、「遊び込む経験」「設定的な活動」「共同的な活動」の具体的項目ごとの結果を一覧にしたものである。グレーの網掛けは、森のようちえんの年少と年中を比較し、5 ポイント以上の差が認められた項目である。

表 1 園での経験の項目ごとの結果

	年少	年中	既存園5歳
【遊びこむ経験】	81.0%	83.0%	66.8%
見通しをもって、遊びをやり遂げる。	61.4%	70.0%	52.9%
先生に頼らずに製作(ものづくり)する。	73.1%	70.1%	64.9%
挑戦的な活動に取り組む。	69.6%	77.6%	59.1%
遊びに自分なりの工夫を加える。	92.7%	92.5%	66.5%
好きなことや得意なことをいかして遊ぶ	91.0%	90.7%	71.6%
自由に好きな遊びをする	98.3%	97.2%	85.6%
【設定的な活動】	30.4%	29.6%	64.2%
見本通りに製作(ものづくり)をする。	28.4%	35.4%	56.2%
小学校のように時間割に沿って活動をする。	21.4%	13.0%	55.0%
先生が決めた活動をする。	33.3%	35.9%	70.2%
(小学校のように)全員で同じことに取り組む。	38.3%	34.3%	75.3%
【共同的な活動】	66.0%	70.6%	71.6%
行事の役割(劇の配役やリレーの順番など)を子どもたちが決める。	60.4%	62.0%	60.4%
友だちと関わる中で、友だちのいいところや得意なことを知る。	81.7%	87.7%	69.7%
目標に向けて友だちと協力して取り組む。	62.6%	69.5%	76.0%
行事(運動会や生活発表会など)で友だちと協力し合う。	59.4%	63.0%	80.2%

年中になって増加した項目は、1位「見通しをもって、遊びをやり遂げる」8.6 ポイント増、2位「挑戦的な活動に取り組む」8.0 ポイント増、3位「見本通りに製作（ものづくり）をする」7.0 ポイント増であった。5 ポイント以上減少した項目は、「小学校のように時間割に沿って活動する」8.4 ポイント減の1項目であった。森のようちえんの子どもが経験する上位3項目は、年少から引き続き1位が「自由に好きな遊びをする」97.2%，2位が「遊びに自分なりの工夫を加える」92.5%，3位「好きなことや得意なことをいかして遊ぶ」90.7%とすべて「遊び込む経験」の項目であった。「共同的な活動」では、「友だちと関わる中で、友だちのいいところや得意なことを知る」が81.7%から87.7%に増加しており、既存園より18 ポイント高い結果であった。一方、「目標に向けて友だちと協力して取り組む」、「行事（運動会や生活発表会など）で友だちと協力し合う」は年中になり増加した項目であるが、既存園よりも低く、森のようちえんは「設定的な活動」だけでなく行事も少なく、目標や行事に向け共同的、協同的に活動することが少ないことが示された。行事等で一斉に共同的に活動することは少ないが、個々の友だちの良さを認め合う肯定的な関係づくりはできている。

3.2 生活習慣・社会情動的スキル・認知的スキルの育ち

子どもたちの生活の様子や育ちについての48項目を【生活習慣】【学びに向かう力（社会情動的スキル）】【文字・数・思考（認知的スキル）】の3つの上位概念と10の下位概念に分類し、「大変思う」を選択した割合を森のようちえんと既存園の年少、年中で比較した。学年ごとの結果と、既存園の結果を1としたときの森のようちえんの割合（単位は倍）を表したもののが表2である。1.5倍以上の項目を薄いグレーに、2倍以上の項目を濃いグレーの網掛けにしている。また、森のようちえんの年少と年中を比較し10 ポイント以上差が認められた項目をグレーで表示している。

表2 生活習慣・社会情動的スキル・認知的スキルの育ちの比較

上位概念	下位概念	森のようちえん		既存園		比較(倍)	
		年少	年中	年少	年中	年少	年中
生活習慣	生活習慣	32%	44%	27%	33%	1.20	1.34
学びに向かう力	好奇心	64%	70%	52%	54%	1.23	1.31
	協調性	37%	55%	26%	33%	1.41	1.66
	自己主張	54%	65%	34%	34%	1.57	1.91
	自己抑制	29%	39%	16%	23%	1.79	1.68
	がんばる力	24%	27%	9%	13%	2.53	2.16
文字・数・思考	文字	31%	54%	38%	68%	0.81	0.78
	数	25%	44%	27%	48%	0.90	0.92
	言葉	39%	51%	29%	48%	1.33	1.06
	分類する力	67%	74%	47%	58%	1.44	1.27

森のようちえんは年中になるとすべての項目で上昇しており、上昇割合が大きい項目は1位「文字」23 ポイント、2位「数」19 ポイント、3位「協調性」18 ポイントであった。既存園と比較すると、「文字」「数」のみ森のようちえんの方が低い項目である。森のようちえんの子どもは自然の中での遊びが多く、「文字」「数」といった机上の学びに興味を持つ敏感期が少し遅い傾向が認められる。一方、【学びに向かう力（社会情動的スキル）】は、既存園との比較では「がんばる力」は2.16倍、「自己主張」1.91倍、「自己抑制」1.68倍、協調性1.66倍であり、【学びに向かう力（社会情動的スキル）】の育ちが顕著であることが、森のようちえんの子どもの育ちの特長である。また、年中が身につけている力の上位は、1位が「分類する力」74%，2位「好奇心」70%，3位「自己主張」65%，身についていない力の下位1位は「がんばる力」27%，

2位「自己抑制」39%，3位「生活習慣」44%であった。森のようちえんの子どもは、生活や遊びを通してモノを比べたり集めたりすることで、体験しながら大小、多少、形など「分類する力」を身につける力に優れ、自然からの刺激に「好奇心」を持ち、「自己主張」する力を身につけている。一方で、「がんばる力」「自己抑制」「生活習慣」は既存園より身についているものの、年中では身につけることが難しい力であると言える。

表3 園での経験の項目ごとの比較

	森のようちえん		既存園		既存園との比較(倍)		
	年少	年中	年少	年中	年少	年中	
【生活習慣】	平均	32%	44%	27%	33%	1.20	1.34
夜、決まった時間に寝ることができる		46%	58%	31%	33%	1.48	1.75
好き嫌いなく食事ができる		22%	24%	16%	17%	1.38	1.37
脱いた服を自分でたためる		30%	47%	22%	32%	1.34	1.50
1人でトイレでの排泄、後始末ができる		40%	73%	35%	52%	1.13	1.39
まわりの人に「おはよう」「さようなら」「ありがとう」などのあいさつやお礼を言える		40%	54%	40%	43%	1.02	1.24
家で遊んだ後、片付けができる		19%	18%	17%	20%	1.11	0.91
食事が終わるまで、席に座っていられる		26%	36%	26%	33%	1.02	1.09
【好奇心】	平均	64%	70%	52%	54%	1.23	1.31
新しいことに好奇心をもてる		63%	61%	54%	54%	1.16	1.13
好きなことに集中して遊べる		72%	77%	65%	68%	1.12	1.14
工夫して遊べる		51%	58%	37%	43%	1.38	1.34
わからないことについて、「なぜ、どうして」など、まわりに質問ができる		63%	72%	56%	58%	1.13	1.24
生き物や植物に興味をもてる		69%	82%	46%	45%	1.50	1.81
【協調性】	平均	37%	55%	26%	33%	1.41	1.66
遊びなどで友だちと協力することができる		38%	59%	28%	40%	1.37	1.49
人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる		38%	54%	21%	23%	1.84	2.35
遊びとき、「入れて」「一緒に遊ぼう」「貸して」など友だちに声かけができる		46%	61%	35%	43%	1.31	1.41
友だちとけんかをしても、あやまるなどして仲直りができる		28%	46%	23%	27%	1.25	1.72
【自己主張】	平均	54%	65%	34%	34%	1.57	1.91
自分が何をしたいかを言える		70%	75%	39%	37%	1.78	2.03
ほしいもの、してほしいことを大人に頼める		56%	73%	47%	46%	1.19	1.58
困ったことがあったら、まわりの人に助けを求めることができる		46%	62%	28%	29%	1.63	2.16
友だちからいなことをされたら、「いや」「やめて」などと言える		57%	67%	33%	35%	1.73	1.93
友だちと意見が違っても、自分の考えを主張することができる		40%	46%	23%	23%	1.69	2.06
【自己抑制】	平均	29%	39%	16%	23%	1.79	1.68
人の話を終わるまで静かに聞ける		25%	26%	14%	20%	1.85	1.34
ルールを守りながら遊べる		34%	47%	20%	31%	1.72	1.52
遊びなどで順番が回ってくるまで待てる		45%	65%	30%	43%	1.49	1.54
夢中になっていることでも、時間がくれば、次のことに移ることができる		23%	30%	10%	12%	2.46	2.42
遊びを中断されても、時間をおいて続けられる		26%	31%	12%	17%	2.29	1.82
自分がやりたいと思っても、人のいやがることはがまんできる		20%	35%	12%	17%	1.59	2.03
【がんばる力】	平均	24%	27%	9%	13%	2.53	2.16
物事をあきらめずに、挑戦することができる		29%	26%	10%	13%	2.81	2.03
どんなことに対しても、自信をもって取り組める		26%	31%	9%	10%	2.96	3.13
自分でしたいことがうまくいかないときでも、工夫して達成しようとすることができる		23%	33%	8%	14%	2.76	2.40
一度始めたことは最後までやり通せる		16%	19%	10%	14%	1.63	1.36
【文字・数・思考】							
【文字】	平均	31%	54%	38%	68%	0.81	0.78
かな文字を読める		28%	51%	42%	68%	0.68	0.74
自分の名前をひらがなで書ける		22%	54%	29%	69%	0.78	0.77
自分の名前を読める		60%	75%	64%	85%	0.93	0.88
10までの数字を書ける		14%	35%	18%	51%	0.74	0.69
【数】	平均	25%	44%	27%	48%	0.90	0.92
1、2、3、4と、20までの数を正しく数えられる		43%	70%	57%	79%	0.76	0.89
指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる		13%	31%	11%	35%	1.19	0.88
「1個、1本……」などの数え方ができる		19%	31%	15%	30%	1.27	1.02
【言葉】	平均	39%	51%	29%	48%	1.33	1.06
ことば遊びができる(しりとり、だじゅれなど)		44%	65%	30%	61%	1.44	1.05
自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる		31%	41%	21%	30%	1.47	1.38
見聞きしたことをまわりの人に話すことができる		54%	56%	43%	59%	1.24	0.96
絵本や図鑑を1人で読める		29%	43%	23%	44%	1.25	0.98
【分類する力】	平均	67%	74%	47%	58%	1.44	1.27
ことばで「多い」「少ない」「大きい」「小さい」を正しく使える		70%	77%	40%	51%	1.74	1.51
身の回りにあるものの長さや大きさ、高さを直接並べて比べられる		51%	65%	33%	45%	1.54	1.44
形について同じ仲間で集められる		70%	74%	56%	68%	1.26	1.09
生活の場面で形にかかわることはを使える(まる、さんかく、しかくなど)		77%	79%	57%	68%	1.35	1.17

園での経験の 48 項目の質問を概念ごとに集計し、すべての質問項目の結果と、既存園との比較を一覧にしたもののが表 3 である。年中になり 20 ポイント以上成長した力は、【生活習慣】の「1 人でトイレでの排泄、後始末ができる」73%，「協調性」の「遊びなどで友だちと協力することができる」59%，と【文字・数・思考（認知的スキル）】の「自分の名前をひらがなで書ける」70%，「ことば遊びができる（しりとり、だじやれなど）」65% であった。年中では、友だちとの関わりが増えることで協力する力が身につくとともに、【文字・数・思考（認知的スキル）】といった知的好奇心が育ち学習することに興味を持つ時期であると言える。年少で半数以上の子どもに身についている力は、10 項目中「好奇心」64%，「自己主張」54%，「分類する力」67% の 3 項目であった。年中になると、そこに「協調性」55%，「文字」54%，「言葉」51% が加わり 6 項目になっている。一方で、「生活習慣」44%，「自己抑制」39%，「頑張る力」27%，「数」44% は、これから伸びる力であると推測される。既存園では、年少で半数以上の子どもに身についている力は「好奇心」52% のみで、年中で「文字」68%，「分類する力」58% の 2 項目が加わり 3 項目である。森のようちえんの子どもは、【生活習慣】と【学びに向かう力（社会情動的スキル）】が既存園より多様に早くより多くの子どもに育つことが示唆された。

3.3 母親の子どもへの意識とかかわり

母親の子どもへの意識とかかわりについての 20 項目の質問を 5 つの概念に分類し、森のようちえんと既存園を比較したものが図 2 である。

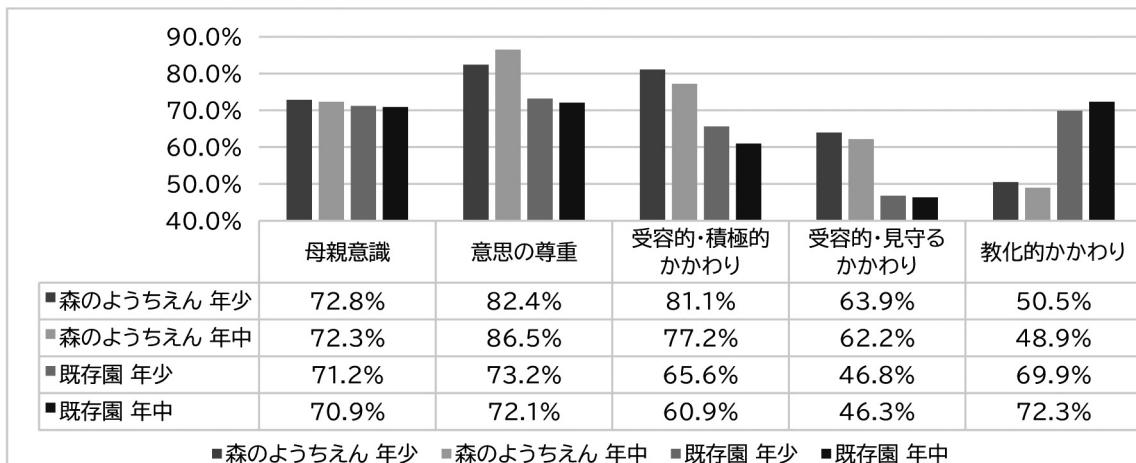


図 2 母親の子どもへのかかわりの概念ごとの割合

森のようちえん、既存園ともに年中になって殆どの母親のかかわりが減少しているが、1 項目ずつ増加しており、森のようちえんは「意志の尊重」（年少 82.4%，年中 86.5%），既存園は「教化的のかかわり」（年少 69.9%，年長 72.3%）であった。年中になり 3 ポイント以上減少した項目は、森のようちえん、既存園ともに「受容的・積極的のかかわり」であり、どちらも年中になり自立を目指し一步引いて見守る姿勢に変化している。

既存園との比較では、【教化的のかかわり】以外すべて森のようちえんの方が高い結果であり、特に【受容的・見守るかかわり】【受容的・積極的のかかわり】は 15 ポイント以上の差が認められた。一方で、【教化的のかかわり】は 20 ポイント以上低く、森のようちえんの母親は子どもの意思を尊重し、受容的に子どもに関わっており、教化的なかかわりが少ないという特徴が認められた。

母親の子どもへの意識とかかわり全20項目を森のようちえん、既存園の学年ごとに集計した結果が表4である。

表4 母親の子どもへの意識とかかわり

	合計	森のようちえん		既存園	
		年少	年中	年少	年中
【養護意識】		72.8%	72.3%	71.2%	70.9%
(1)子どもの健康に気をつけている。		98.9%	99.1%	98.9%	98.9%
(5)子どもを傷つけるような言動をした場合は、子どもに謝る。		96.2%	96.4%	89.7%	87.8%
(9)子どもが何をしたいのかを把握している。		84.2%	85.6%	79.3%	79.2%
(19)私が一緒にいてあげないと、子どもは自分のことができないのではないかと心配になる。		12.0%	8.1%	16.8%	17.5%
【意志の尊重】	合計	82.4%	86.5%	73.2%	72.1%
(4)子どもがやりたいことを尊重し、支援している。		97.8%	99.1%	91.8%	90.0%
(7)叱るとき、子どもの言い分を聞くようにしている。		88.5%	95.5%	82.5%	82.0%
(10)どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている。		86.3%	91.9%	77.6%	75.9%
(18)何事にも子どもの意見や要望を優先させている。		56.8%	59.5%	40.8%	40.3%
【受容的・積極的かかわり】	合計	81.1%	77.2%	65.6%	60.9%
(6)子どもに様々な体験をさせるようにしている。		95.6%	94.6%	82.8%	83.1%
(13)叱るよりも褒めるようにしている。		84.7%	81.1%	62.1%	54.3%
(14)子どもが何かをするとき、できるように手伝っている。		62.8%	55.9%	51.9%	45.4%
【受容的・見守るかかわり】	合計	63.9%	62.2%	46.8%	46.3%
(8)子どもが自分でやろうとしているとき手を出さずに最後までやらせるようにしている。		90.7%	91.9%	81.9%	82.8%
(16)指図せずに、子どもに自由にさせている。		72.1%	65.8%	45.4%	43.8%
(20)私がやってはいけないと言ったことを子どもがしたとき、黙ってみている。		29.0%	28.8%	13.0%	12.4%
【教化的かかわり】	合計	50.5%	48.9%	69.9%	72.3%
(2)子どもが悪いことをした場合、叱っている。		97.8%	93.7%	96.7%	97.9%
(3)友達と仲良くするように教えている。		79.2%	69.4%	95.9%	95.6%
(11)小学校入学までに読み書きができるようにしている。		36.6%	41.4%	69.7%	77.8%
(12)私が決めたことに対しては、子どもに従わせている。		39.9%	51.4%	63.4%	63.0%
(15)嫌なことがあっても、我慢するように教えている。		27.3%	20.7%	48.2%	53.2%
(17)子どもに、何事もどんなふうにしたら良いかを、細かく教えている。		21.9%	17.1%	45.2%	46.3%

森のようちえんと既存園それぞれが年中になり、5ポイント以上上昇した項目をグレーの網掛けに表している。森のようちえんの年中で増加した母親のかかわりは、「叱るとき、子どもの言い分を聞くようにしている」7.0ポイント増（88.5%⇒95.5%）、「どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている」5.6ポイント増（86.3%⇒91.9%）といった「意志の尊重」の項目であった。減少した項目は、「友達と仲良くするように教えている」9.9ポイント減（79.2%⇒69.4%）、「嫌なことがあっても、我慢するように教えている」6.6ポイント減（62.8%⇒55.9%）など、教えたり手伝うことが減少し、子どもの主体性に任せ、子どもを信頼するかかわりになっている。一方で、年中になり一番増加した項目は、「私が決めたことに対しては、子どもに従わせている」11.5ポイント増（39.9%⇒51.4%）であり、「指図せずに、子どもに自由にさせている」は6.4ポイント減少（72.1%⇒65.8%）している。「私が決めたことに対しては、子どもに従わせている」は、森のようちえんの半数以上が選択しており、学年が上がることで子どもの思いを尊重しつつも母親の思いや願いも強くなり、森のようちえんの母親も教化的にかかわることが増える傾向にあることが示唆された。

既存園で年中になり 3 ポイント以上変化した項目は、「小学校入学までに読み書きができるようにしている」8.1 ポイント増（69.7%⇒77.8%）、「嫌なことがあっても、我慢するように教えている」5.0 ポイント増（48.2%⇒53.2%），減少した項目は、「叱るよりも褒めるようにしている」7.8 ポイント減（62.1%⇒54.3%），「子どもが何かをするとき、できるように手伝っている」6.5 ポイント減（51.9%⇒45.4%）であった。

森のようちえんと既存園の年中の母親のかかわりを比較し、森のようちえんの方が高かった項目 1 位は、【受容的・積極的のかかわり】の「叱るよりも褒めるようにしている」26.8 ポイント差（森 81.1%，既 54.3%），2 位【受容的・見守るのかかわり】の「指図せずに、子どもに自由にさせている」22.0 ポイント差（森 65.8%，既 43.8%），3 位【意志の尊重】の「何事にも子どもの意見や要望を優先させている」19.2 ポイント差（森 59.5%，既 40.3%）であり、子どもの意思を尊重し受容的に関わる姿が特徴的である。

一方で、既存園のほうが高かった項目は、「小学校入学までに読み書きができるようにしている」36.4 ポイント差、「嫌なことがあっても、我慢するように教えている」，「子どもに、何事もどんなふうにしたら良いかを、細かく教えている」であり、教える、従わせるといった母親が望む子ども像を目標にした関わりが多い。

3.4 子育てで力を入れていること

森のようちえんの保護者が、子育てで特に力を入れていることを 3 つまで選択した結果を年少、年中ごとに集計したものが表 5 である。

表 5 子育てで力を入れていること

		年少保護者	年中保護者	保育者
1	健康な身体	39.9%	① 49.5%	③ 33.6%
2	人への思いやり	39.3%	② 37.8%	20.9%
3	自然と触れ合う	33.3%	③ 27.9%	① 56.0%
4	豊かな情操や感性	32.2%	⑤ 25.2%	② 37.3%
5	屋外でのびのびと遊ぶ	31.1%	23.4%	⑤ 32.1%
6	遊びの中で興味を持つ	25.1%	④ 27.0%	③ 33.6%
7	個性を伸ばす	23.5%	20.7%	14.9%
8	基本的な生活習慣	18.6%	13.5%	12.7%
9	自分のことは自分で	16.9%	20.7%	19.4%
10	友だちを大事に協力	14.2%	12.6%	11.9%
11	意見を主張し、話を聞く	6.0%	15.3%	10.4%
12	粘り強く挑戦	10.9%	7.2%	7.5%
13	五感を使って表現	9.8%	7.2%	15.7%
14	礼儀作法を身につける	2.7%	5.4%	4.5%
15	文字や数を学習	0.5%	0.0%	0.7%
16	国際感覚・外国語	0.5%	1.8%	0.7%
17	その他	0.5%	0.9%	7.0%

森のようちえんの保護者が子育てで力を入れていることは、年少、年中ともに 1 位「健康な体」，2 位「人への思いやり」，3 位「自然と触れ合う」であった。学年が上がっても上位の項目順に殆ど変化はみられなかった。年少と年中を比較し増加した項目 1 位は、「健康な体」（39.9%⇒49.5%），2 位「意見を主張し話を聞く」（6.0%⇒15.3%），3 位「自分のことは自分で」（16.9%⇒20.7%）であり、母親たちは年中になり健康で自立した主体者として、友だちとの関係を築き、ひと、もの、ことに興味を持ち、豊かな感性を育んでほしいと願っている。年中と保育者を比較し、年中の方が 10 ポイント以上高かった項目は、「人への思いやり」16.9 ポイント差（年中 37.8%，保 20.9%）「健康な体」15.9 ポイント差（年中 49.5%，保 33.6%）であった。保育者の方が 10 ポイント以上高かった項目は、「自然と触れ合う」28.1 ポイント差（年中 27.9%，保 56.0%），「豊かな情操や感性」12.1 ポイント差（年中 25.2%，保 37.3%）であった。

4. 考察

4.1 園での経験の割合

「遊び込む経験」「設定的な活動」「共同的な活動」のバランスは、既存園が 1：1：1 で概ね同程度におこなっている一方、森のようちえんは 1.2：0.4：1 と「遊びこむ経験」が多く「設定的な活動」が大変少ない。森のようちえんの子どもが経験する上位 3 項目は、年少から引き続きすべて「遊び込む経験」の項目であり、自然の中で主体者として自分の好きな遊びを選択し、得意なことをいかしたり、遊びに自分なりの工夫を加え探究する経験をしている。年中になって増加した項目は、「見通しをもって遊びをやり遂げる」「挑戦的な活動に取り組む」「見本通りに製作（ものづくり）をする」であった。年中になり、遊びの見通しを持ち最後まであきらめずやり遂げる経験や、できないかもと思えることにも挑戦する力が身についている。また、自由に好きな遊びだけをするのではなく「見本通りに製作（ものづくり）をする」といった子どもだけでは経験できなかつたり、興味を持たない多様な経験にも挑戦させたいという保育者のねらいが読み取れる。

「共同的な活動」では、「友だちと関わる中で、友だちのいいところや得意なことを知る」といった友だちを肯定的に認め受容する経験、「目標に向けて友だちと協力して取り組む」といった共同性や協調性を育む経験が増加しており、友だちとのかかわりから学ぶことが増える年中児の発達に合わせた経験が行われている。

4.2 生活習慣・社会情動的スキル・認知的スキルの育ち

森のようちえんの年中はすべての項目で成長が認められた。年中の【生活習慣】【学びに向かう力（社会情動的スキル）】【文字・数・思考（認知的スキル）】の育ちを既存園と比較すると、【生活習慣】1.34 倍、【学びに向かう力（社会情動的スキル）】1.74 倍【文字・数・思考（認知的スキル）】1.01 倍と、3 概念ともに森のようちえんの方が身についていた。また、【学びに向かう力（社会情動的スキル）】24 項目のうち、半数（50%）の子どもが身につけている項目は、森のようちえん 13 項目に対し、既存園は 3 項目であった。【文字・数・思考（認知的スキル）】では、森のようちえん、既存園とともに 15 項目中 10 項目と同数であった。これらのことから、森のようちえんの年中は、森の中での主体的で自分のことは自分で行う生活を通し、【学びに向かう力（社会情動的スキル）】の育ちが著しく、【生活習慣】は自立することが自然と身についており、【文字・数・思考（認知的スキル）】についても、既存園と同程度の成長をしていることが示唆された。「文字」「数」の 2 項目は既存園より低い結果であったが、森のようちえんの子どもは自然の中での遊びが多く、「文字」「数」といった机上の学びに興味を持つ敏感期が少し遅い傾向が認められる。年中になると興味を持つ子どもが増加し、上昇割合が大きい項目 1 位「文字」、2 位「数」であったが、既存園の方が伸びが大きく差が開く結果であった。年中になり急成長した項目は、「排泄」や「友だちとの協力」、「ひらがな」、「言葉遊び」などであり、年中では友だちとの関わりが増えることで協力する力が身につくとともに、知的好奇心が育ち学習することに興味を持つ時期であると言える。

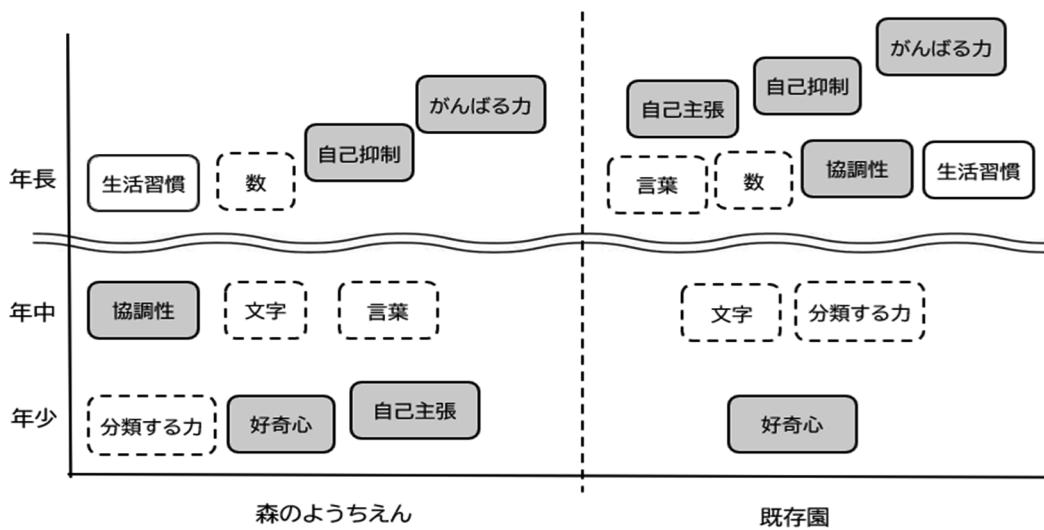


図3 生活習慣・社会情動的スキル・認知スキルの成長時期

【生活習慣】 【学びに向かう力（社会情動的スキル）】 【文字・数・思考（認知的スキル）】の育ちの時期を森のようちえんと既存園で比較し、50%以上の子どもに身についた時期を図示したものが図3である。グレーの網掛けが社会情動的スキル、点線の項目は認知スキルの項目である。成長段階として、森のようちえんは年少の時期に「好奇心」「自己主張」「分類する力」が身につき、年中では「協調性」「文字」「言葉」が身につく一方で、「生活習慣」「自己抑制」「頑張る力」「数」はこれから伸びていく力である。既存園では、年少は「好奇心」のみ、年中では「文字」「分類する力」が加わるもの、森のようちえんの子どものほうが、【学びに向かう力（社会情動的スキル）】だけでなく、「言葉」といった認知的スキルについても早く多様な力が育っていることが示唆された。

4.3 母親の子どもへの意識とかかわり

森のようちえん、既存園ともに、年中では母親のかかわりのほとんどの項目が減少しているが、それぞれ1項目のみ、森のようちえんでは「意志の尊重」、既存園は「教化的のかかわり」が増加している。森のようちえんは「教化的のかかわり」以外のすべての項目で既存園より高く、母親は子どもに既存園よりも多くかかわっており、その視点は肯定的な眼差しであった。森のようちえんの母親は、子どものやりたいことを尊重し、子どもの気持ちを受容して見守り、子どもが多様な体験ができるような丁寧な関わりが多く、教化的なかかわりが少ないという特徴が認められ、年中になるとその傾向がより顕著になっている。

一方で、年中になり一番増加した項目は、「私が決めたことに対しては、子どもに従わせている」であり、「指図せずに、子どもに自由にさせている」は減少している。「私が決めたことに対しては、子どもに従わせている」は、森のようちえんの年中の母親の半数以上が選択しており、既存園だけでなく学年が上がることで子どもの思いを尊重しつつも母親の思いや願いが強くなり、教化的にかかわることが増える傾向にあることが示唆された。「教化的のかかわり」の項目の中で、森のようちえんの母親が低い項目は、「友だちと仲良くするように教えている」「嫌なことがあっても我慢するように教えている」「子どもに、何事もどんなふうにしたら良いかを、細かく教えている」といった子どもに「教える」項目であり、子どもの成長を先回りして教えるのではなく、子ども自身が失敗も含めた経験から自分の力で身につけることを望んでいる姿が特徴的である。

4.4 子育てで力を入れていること

森のようちえんの保護者が子育てで力を入れていることは、年少、年中ともに1位「健康な体」、2位「人への思いやり」、3位「自然と触れ合う」であった。学年が上がっても上位の項目順に殆ど変化はなかつた。年中になり増加した項目は、1位「健康な体」、2位「意見を主張し話を聞く」、3位「自分のことは自分で」であり、母親たちは年中になり少しづつ主体者として自立して欲しいとの思いで子育てをしている。

森のようちえんの保育者の1位は「自然と触れ合う」、2位が「豊かな情操や感性」であった。保育者は、「自然と触れ合う」ことで「豊かな情操や感性」を育むことそのものを目標としている。一方、保護者は自然との触れ合いを通して「健康な体」や「人への思いやり」が育まれることを望んでおり、そこに乖離がみられる。保育者は、豊かな森の自然と触れ合うことによって、子どもに多様な力が身につくことを求めている保護者の思いを理解し、自然保育を通して子どもに育っている力を保護者に日々伝え、その思いに応えていくことが求められている。

4.5 今後の研究

今回の調査は、森のようちえんの社会情動的スキルと認知的スキルの育ちに関する縦断調査の2年目の結果である。今後引き続き縦断調査を行い、森のようちえんの子どもの園での育ちの特性と、自然体験を重視した保育が就学後の子どもの育ちに与える影響について検証していきたい。

【謝辞】

本研究を行うに当たり、アンケートを協同で作成していただいた森のようちえん さんぽみち NPO 法人ネイチャーマジック理事長 野澤俊索様に、心より感謝申し上げます。また、アンケートに快くご協力いただきました全国の森のようちえんの保育者、保護者の皆さんにも心よりお礼申し上げます。

【引用・参考文献】

- ・ベネッセ：幼児期から小学4年生の家庭教育調査・縦断調査 最終閲覧 2022.12
https://berd.benesse.jp/up_images/publicity/pressrelease_20190225_.pdf, 2019,
- ・ベネッセ：園での経験と幼児の成長に関する調査 最終閲覧 2022.12
<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4940>, 2016
- ・今村光章, 2014, 「現代の学校教育の再考契機としての森のようちえんの意義 —「自然学校としての森のようちえん」を手がかりに—」, 『環境教育』, 23 (3), pp.4-16.
- ・金子龍太郎・西澤彩木：森のようちえんに通う一女児の縦断的観察：主体性の育ちを中心に：3年間記録の1年目, 『幼年教育研究年報』, 39, pp.71-80, 2017.
- ・河崎晃博：福井市清水北地区における「森のようちえん」活動, 『環境教育』, 26, pp.60-66, 2016.
- ・経済協力開発機構（OECD）：社会情動的スキル～学びに向かう力～, 明石書店, 2018.
- ・木戸啓絵：「森のようちえん」における他機関との連携の実態－三重県の事例から－, 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要 48, pp.45-58, 2016.
- ・木戸啓絵：森の幼稚園の事例研究～ホリスティック教育の観点から～, 青山学院大学教育学会紀要』, 56, pp.23-33, 2012.
- ・文部科学省：幼稚園教育要領, 2017.
- ・西澤彩木・田中裕喜・菅眞佐子：幼児における自然環境についての学び：「森のようちえん」の活動を通して (1), 『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』, 13 (1), pp.23-37, 2016.

- ・NPO 法人森のようちえん全国ネットワーク連盟, <http://morinoyouchien.org/>, 2023.1.7.
- ・大谷彰子：森のようちえんの園児の社会情動的スキルの育ちに影響を与える要因－園での生活経験と保護者のかかわりに焦点を当てて－, 芦屋大学論叢第 76 号, pp.43-54, 2022.
- ・樂木章子：森のようちえんを住民自治運動の歴史に位置づける試み－鳥取県智頭町の事例－, 集団力学第 39 卷, pp.3-20, 2022.
- ・汐見稔幸：『こども・保育・人間』, Gakken, 2018.
- ・杉山浩之・牧亮太・黒田愛乃：森のようちえんにおける子どもへの教育効果～保護者アンケート及びインタビューを通して～, 『広島文教教育』, 30, pp.23-32, 2015.
- ・友定啓子：「森のようちえん」の保育的意義－人とかかわる力を育む視点から－. 研究論叢 61, pp.269-282, 2011.
- ・山口三和・酒井真由子・木戸啓絵・大道香織：幼児期の経験がレジリエンスと自尊感情に及ぼす影響－「森のようちえん」の卒園児に注目して－, 上越教育大学研究紀要第 40 卷, pp.495-506, 2021.
- ・柳原高文：「森のようちえん」における園児の「学び」－サイエンス・プロセス・スキルの視点から－, 名寄市立大学紀要第 13 号, pp.45-55, 2019.
- ・柳原高文：「森のようちえん」における園児の「アクティブ・ラーニング」および「生活科」とのかかわり, 名寄市立大学紀要, 12, pp.11-21, 2018.
- ・吉澤英里・藤田弘美・前川真姫・安久津太一：森のようちえんの遊びで観察される「幼児期の終わりまでに育つてほしい 10 の姿」の特徴～認可保育園との比較に基づく一考察～, チャイルド・サイエンス = Child science, 子ども学 21, pp.58-61, 2021.